

論文・レポート執筆の手引き

第5版（2006年4月）

山形大学地域教育文化学部 金井雅之

以下で述べることは必要最低限のことである。詳しくは、論文やレポートの書き方に関する市販の書物（末尾文献一覧参照）を参照すること。とりあえず読みやすいものとして、小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書，2002年）。

1. 総論

- 「学術論文」およびその簡易版である「レポート」は、自分が設定した具体的テーマについて、学術的見地から客観的事実に基づいて論理的に議論を展開し、明確な結論を提示するものである。
- 学術論文やレポートは、いわゆる「作文」や「感想文」、新聞の「論説文」とは違い、自分の主観的感想や意見を述べるものではない。事実や証明可能な推論に基づかない意見は書いてはならない。
- 一方で、これらは「読書レポート」や「調査報告書」でもない。先行研究を単に整理しただけのものや、データを単に羅列しただけのものは、論文とはいわない。それらをもとに自分自身でオリジナルな議論を展開しなければならない。

2. 各論

2.1. 構成

- 論文・レポートの構成は、「序論」「本論」「結論」の三部分からなるのが基本である。全体の中での各部分の分量は、序論が1～2割、結論が1割程度が普通（分野やテーマによって異なる）。

「序論」：テーマの設定（なぜその問題を取り扱うか、その問題が解明されるとどのようなメリットがあるか）、先行研究の整理（そのテーマについてこれまで何がどこまで解明されているか、まだ解明されていない点（＝あなたがこの論文の中で論じるべきこと）は何か）、この論文の中で解明すべき具体的目標の設定（“なぜ～は～なのか”といった具体的な文章をいくつか提示する）。

「本論」：データや理論モデルに基づいて、序論で設定したテーマに関して隙間のないように論理を組み立てる。

「結論」：序論で設定した具体的目標の各文章に対応してそれぞれ結論を付す。そして序論で設定したテーマに関して、今回の論文では解明できなかった今後の課題を整理する。

- テーマの設定は論文執筆において決定的に重要である。あまりに大きすぎる難しいテーマを設定しても、その論文の範囲内で解決できなければ意味がない。論文には「落としどころ」が必要である。

2.2. 先行研究・文献引用

- 先行研究をきちんと踏まえているかどうかは、その論文の学術的評価を左右する。学問は積み重ねであり、既存の研究成果と関連のない着想は、（それが真の独創であるごく稀な場合を除いて）しばしば単なる思いつきである。仮に自分の論文が真の独創であったとしても、先行研究がなぜ間違っているかを指摘することは、自分の研究の独創性と矛盾するものではない。
- 他人の研究や既存のデータを引用する際には、必ず出典を明記する。出典が記されていない引用は**盗作**に他ならず、その論文および著者の学問的信用を失墜させる。文献引用の際のスタイル（著者名・雑誌名・出版年など必要な書誌データと、それらの記述の仕方）は、各学問分野によって慣例が定まっている。それに従わない自己流の引用は、やはり学問的評価を落とす。具体的なスタイルについては、論文・レポートの書き方に関する市販の書物や、自分の関係する学会の学会誌などの投稿規定を参照すること。日本社会学会の機関誌『社会学評論』では

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jss/JSRstyle/JSRstyle.html>

にてスタイルガイドを公開している。

- 論文の末尾には必ず参考文献一覧を付す。本文の中で引用した文献はもちろん、直接引用や言及はしなかったがその分野において重要な先行研究なども含める。

2.3. 文体

- 論文・レポートは原則として「である」調で執筆する。「です・ます」調や「だ」調（“～だ”）は使ってはならない。ただし、他人の文章を引用する場合はもちろんこの限りではない。
- あいまいな表現、主観的な表現、自信のない表現は避ける。「～と思う」「～かもしれない」などは論外。データ等に基づいて自信をもって証明できないことは、そもそも論文に書くべきではない。また、実際には客観的に証明できることを“謙遜”してわざと控えめな言い方にする配慮は、学術論文では有害無益である。読者としてはその論文の内容を信用してよいものかどうかわからなくなるからである。
- 「？」や「！」などの記号は避ける。

2.4. その他

- 論文やレポートを執筆する際は、あらかじめ見出しや要点を箇条書きにしてメモにまとめておくとよい。いきなり文章にまとめようとする、どうしても論理展開がぶれる。
- 見出しはなるべく番号をつけて構成すると、論理展開は明確になってよい（1, 1.1, 1.1.1, ...）。
- 慣れないうちは論理の展開がどうしても一人よがりになりやすい。自分自身はわかっていることでも、他人から見ると理解できないことはたくさんある。そういうときは友人などに読んでもらって、論理の筋が通っているか意見を聞いてみるとよい。
- 小学校以来の「作文」の習慣はなるべく早く捨てること。論文は作文ではない。レポートの末尾に道徳的教訓や決意を必ずつけたがる人がいるが（ex. “これから自分自身の生活スタイルを見直していかなければならないと思いました。”）、不要である。

3. 文献資料の集め方

別冊資料「論文・レポート執筆のための文献資料の集め方」参照。

4. 参考文献

Huff, Darrell, 1954, *How to Lie with Statistics*, London: V. Gollancz. (=高木秀玄訳, 1968『統計でウソをつく法——数式を使わない統計学入門』講談社.)

鹿島茂, 2003, 『勝つための論文の書き方』文藝春秋.

荻谷剛彦, 2002, 『知的複眼思考法——誰でも持っている創造力のスイッチ』講談社.

日本社会学会編集委員会, 1999, 『社会学評論スタイルガイド』日本社会学会編集委員会.

野矢茂樹, 1997, 『論理トレーニング』産業図書.

野矢茂樹, 2001, 『論理トレーニング 101題』産業図書.

小笠原喜康, 2002, 『大学生のためのレポート・論文術』講談社.

小笠原喜康, 2003, 『インターネット完全活用編 大学生のためのレポート・論文術』講談社.

佐藤文広, 1994, 『これだけは知っておきたい 数学ビギナーズマニュアル』日本評論社.

- 杉本大一郎, 2003, 『使える数理リテラシー』 放送大学教育振興会.
- 高木隆司, 1998, 『理科系の論文技法——創造的コミュニケーションの技術』 丸善.
- 東京大学教養学部教養学科第三, 1992, 『卒業論文執筆必携 第5版』 東京大学教養学部教養学科第三.
- 上田尚一, 2005, 『統計グラフのウラ・オモテ——初歩から学ぶ, グラフの「読み書き」』 講談社.
- 山内志朗, 2001, 『ぎりぎり合格への論文マニュアル』 平凡社.
- 吉田健正, 1997, 『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方』 ナカニシヤ出版.